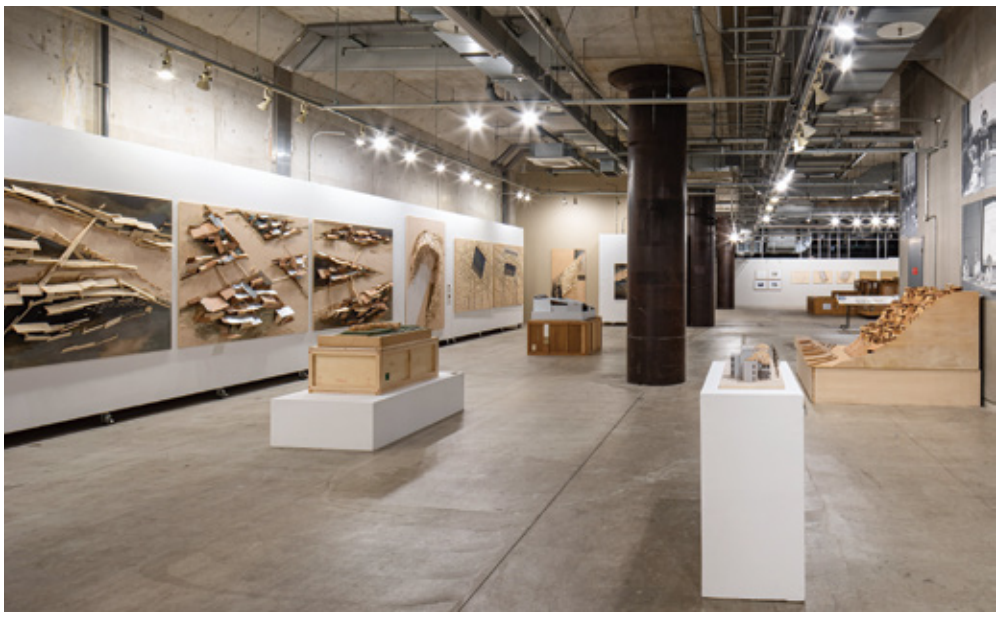
HEADLINE
■ 2020年、現在を想う（川俣 正）
■ 「都市への挿入」川俣正展について
■ 都市と仮囲い
■ リモートオープンミーティング

BankART NEWS Vol.18
発行: BankART1929
2021年1月8日発行
特集号

BankART Life VI
川俣 正「都市への挿入」
特集号
Vol.018



2020年、現在を想う

今回、横浜のBankARTからプロジェクトを依頼された。2012年に以前の建物が倉庫だったことから、その内外に運送用パレットを使ってインスタレーションを行った。それから8年ぶりに新たなBankARTの建物とその周辺で、何か行えないかとの事だった。
昨年、いくつか候補地を訪ね、横浜美術館周辺の変貌ぶりに驚いた。また市役所も移転され、どこにいってもまさに工事の真っ最中だった。こうした変貌する現在進行形の横浜を想定してプランを作った。工事前のフェンスに囲まれた空き地、歩道橋の踊り場などを工事用フェンスと単管を組み立てて、架設の工事現場を作ることを考えた。最終的に使用許可の下りた駅構内と歴史建造物として使用されている建物の内外の2箇所で、組み立てることとなった。
現在この周辺で行われている多くの工事現場の中に、工事現場を装った場をその中に入れ込む。工事をしない工事現場。工事をするように見せてるだけの偽りの現場。そしてそこに人が入りこむことが出来る。単管が組まれ、鉄板の塀で囲まれた構造物の中を、人は恐る恐る入り込む。
通常の工事現場では、一般の人は中に入ることすら許されない。鉄の素材の剥き出しの荒々しい殺伐とした空間に、人は何を見るのだろうか。多くの人は、工事が終わり、現代的で洗練され清潔で優雅な建物の空間に囲まれ、その中で都市での生活を満喫する。
現代は、ますます不浄なものや汚く危なっかしい場や物事がブリーチアウトされ、無臭の空間が広がっている。セキュリティーの名のもとに、全てがコントロールされた管理社会の中で、身を潜めて暮らすことが、自由を確保する唯一の手段であるかの様に。この様な都市の状況と現在のコロナ禍の中で、はたして一体何が出来るのかをここでもう一度考えてみたい。

2020年9月　川俣 正

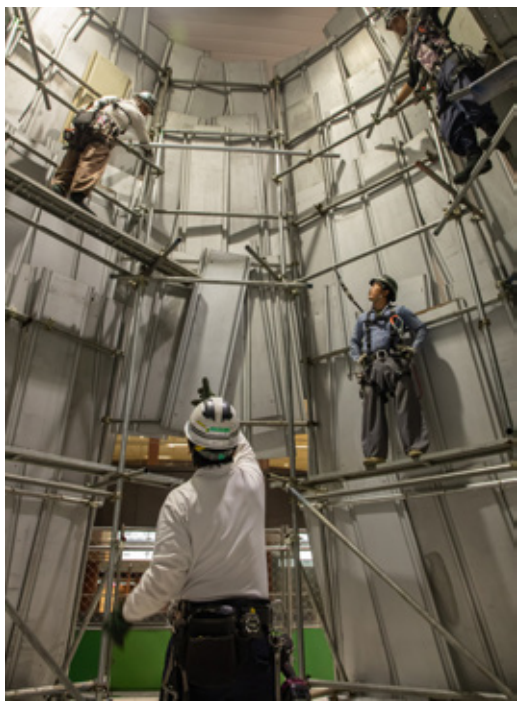
BankART Life VI「都市への挿入」川俣 正
会期｜2020年9月11日［金］～10月11日［日］
会場｜BankART Station、BankART Temporary、馬車道駅構内
主催｜BankART1929　共催｜横浜市文化観光局　助成｜神奈川県文化芸術活動再開加速化事業補助金

BankART Life VI

「都市への挿入」川俣 正展について

ヨコハマトリエンナーレ2020連動の「都市への挿入　川俣 正 BankART Life VI」がスタートした。日本最大規模の展覧会と協働するにあたり、BankART 1929がセレクトしたアーティストは川俣正という一人のアーティストだ。複雑な様相を呈しているヨコトリ本体に対して、単純明快でいこうと考えたからだ。川俣氏の作品が単純というのではない。むしろ氏の作品は、緻密に組み立てられた構成は驚くほど複雑だし、遠い場所（空間/時代）をみているし、そう簡単に理解できるものではない。とはいえ、氏の作品は、理屈ぬきに都市の中（あるいは社会の中で）にはっきりとした立ち位置とメッセージをもっており、誰もが強いインパクトを受ける作品なのだ。特設ブログ（https://note.com/bankart_life6）から垣間みることができるように、生みの苦しみが連続のプロジェクトではあったが、設計、施工チーム、グラフィック、web担当、映像、写真、コーディネートスタッフ、アルバイト、横浜市文化観光局、整備局、環境創造局、横浜高速鉄道（株）、その他関係者各人がそれぞれの立場で全力をつくしてくれたおかげで、なんとか実現にこぎつけることができた。ただ、展覧会は9.11でスタートしているのにチラシの表紙を飾る作品はまだ着手されていない。9.14朝から、元気よくつくり始めるので見守っていただきたい。これから台風もあるし、まだまだハードルがあると思うが、ひとつずつ丁寧に乗り越えていきたい。出来上がった作品は少し派手かもしれないが、それを支える日常は極めて淡々とした営みなのだ。

（2020.9.12、BankART1929ブログより）



都市と仮囲い

今回の川俣氏の作品の素材の選択は、新高島地区、北仲地区のあらゆる場所でみかける平板鋼板で囲まれた工事中の空間から引用だという。確かに、BankART Stationがある新高島地区は、まさに大規模建築の工事中だらけだし、川俣さんが下見にこられた時期の北仲地区もほとんどが仮囲いで、入ること、見ることができない場所が多かった。川俣氏は、活動初期の頃から、廃材（木材）を使ってのインスタレーションを続けており、いつも「工事中」なのだが、反転して、実際の町で建てられている木造家屋の構造が、川俣氏の作品のように見えてきたのが懐かしい。あれから既に40年以上経過しており、都心部では木造の棟上げはほとんど見る事はなくなった。仮囲いの中で作られていくRC造や鉄骨造の現代建築。街行く人は、囲いの表面をなぞるだけで、その内側には興味を示さない。棟上げのときに皆でおこなった「もちまき」という祭りも存在しない。都市は知らない間に誰かに占有され、忘却された空間だけが積層していく。川俣氏はこうした現代都市の風景を否定するわけでも肯定するわけでもなく、閉鎖された空間を盗み見し、挿入し、共有していこうとする視線と勇気を与えてくれるのだ。

（2020.9.18、BankART1929ブログより）

川俣展 リモートオープンミーティング

9月11日（金）18時45分から45分程度、川俣正展のオープニングパーティではなく、「オープニングミーティング」をリモートで行った。乾杯は、ワイン、ウーロン茶、ビール等、60ミリ程度の小さなカップ一杯のみ。文化観光局局長神部氏、川俣氏のトークの後、参加者に自由に手をあげてもらい、遠くに住むチャーミングでたくましい恋人に各々が挨拶とエールを送った。

（2020.9.11、BankART1929ブログより）